



いづみ

No.78

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 48



《祈跡》

花輪 大輔

(2ページに「作者の言葉」)

自作自選 48

作者の言葉

近年は困難に立ち向かう人間の意志の在り様を、個人の感覚を通して彫刻作品として表現することをテーマとしています。特に内径と外径の関係性や、その関係性の向こう側にある形態の追究を中心に彫刻研究に取り組んでいます。ここで紹介する作品は第 95 回記念道展に出品したものです。

(1973 年、釧路市生まれ。札幌市在住、道展会友)

タイトル：祈跡
制作年：2021 年
素材：水性樹脂、鉄粉
サイズ：H295×W90×D70cm
設置場所：作家蔵

連載

宮の森の四季 48

本郷新記念札幌彫刻美術館

館長 吉崎 元章

美術館のポテンシャル

当館には、作品以外にも本郷新が残した数多くの資料を所蔵しています。スケッチブック、アルバム、生原稿、手紙、ノート、スケジュール帳、メモ書きのある壁掛けカレンダー、彫刻設置の契約書、スクラップブック、蔵書…。今年度から館長になる前も、同じ市内の美術館の学芸員として当館との関わりは少なからずありましたが、これほどの充実ぶりだとは知りませんでした。それらを丁寧に紐解いていくと、いろいろなことが解ってきます。

昨年 11 月 3 日の「サンクスデー」で行った《風雪の群像》についての私の講話も、それらを活用したものです。いま調べはじめているのは、記念館となっているこの邸宅を、本郷新がどれくらい利用したのかということです。滞在した月日やその時の行動が資料からある程度わかるのですが、その話もぜひ何かの機会にしたいと思っています。

話は変わりますが、昨年 11 月下旬に、錆が目立ってきていた本館と記念館の門と柵を、建設当時の色に塗り替えました。塗装面を紙やすりで削って古い塗装膜を確認するとともに、当時の写真やその頃を知る方の証言などをもとに色を特定したものです。建物とマッチした落ち着いた雰囲気に戻りましたので、来館時に気に掛けて見ていただければ幸いです。

これまでを継承しつつも、この館の潜在的な価値をさらに引き出した、時代に即した美術館にしていきたいと思っていますので、これからの活動にご期待ください。



もう一つの「石川啄木像」

友の会副会長 大内 和

札幌で石川啄木像と言えば大方の人は大通公園西3丁目にある「石川啄木像歌碑」(坂垣道作)を思い浮かべるに違いない。しかし、札幌にはもう一つの啄木像があるのをご存じだろうか。

JR札幌駅の近く、北区北7条西4丁目、札幌クレストビル1階の玄関わきに鎮座している「石川啄木胸像」がそれだ。高さ4,50cmほどの小ぶりの像で、ケースに入っているが、外光が反射してやや見えにくいせいか、人通りの割には啄木に気づく人は少ないようだ。何故ここに啄木の像があるのだろうか。

啄木が放浪の旅の途中、大火に見舞われた函館から札幌に足を踏み入れたのは1907年(明治40年)9月14日。一昨年7月、急逝した札幌の歴史作家・好川之範さんの著書「啄木の札幌放浪」(1986年刊)には「14日、停車場に道庁勤務の向井永太郎、松岡政之助が啄木を出迎える。啄木は二人の下宿である北七条西四丁目四番地田中サト宅に住まうことになる」とある。

啄木の札幌滞在はこの後、小樽の新聞社に職が見つかり札幌を離れる9月27日までのわずか2週間ほどに過ぎない。後年、田中家が札幌を引き払ったため下宿跡の所在は長年、不明だった。その疑問を解いたのが45年前、当時、札幌市北区の広報担当だっ

た好川之範さん。北区の歴史を掘り起こす中で、同住所にあった「北七条郵便局」の関係者にたどり着き、局の前身が下宿跡と探り当てた。その経緯が1976年1月、道新学芸欄に「啄木の下宿跡 追跡発見の記」として掲載された。

郵便局は現在、北7条西6丁目に移転、啄木像が置かれているクレストビルこそ啄木下宿跡という訳である。好川さんの追悼誌「知己往来」が昨年、刊行された。その中で好川さんの仲間、村岡章吾さんがこの彫刻のことを書いているので引用させていただく。

「現在、北区北7条西4丁目札幌クレストビル1階に「啄木胸像」が表示板とともに設置されているが、かつては北区役所ロビー、その後、北七条郵便局内に置かれていた。(中略)話は昭和50年に遡るが、私や好川さんが仕事で残業していたとき、良く出前を頼むラーメン店があった。この胸像は、その店主であるアマチュア彫刻家の葛西茂雄氏の作品である。今も、北23条でラーメン店「茂」を営むが、たしか胸像制作を依頼したのは好川さんだったと記憶している」

啄木像の発注者が好川さんだったとは一。本来ならば、「啄木の胸像」をサカナに好川さんと一献傾けていたに違いない。その機会がなくなったのは寂しい限りである。

さわることの`共鳴、を求めて

大分大学シンポジウム「彫刻をさわる時間」にオンライン参加

会員 越山 正禎

2021年10月6日、オンラインで開催された大分大のシンポジウム「彫刻をさわる時間」に参加、盲学校の生徒が公園の彫刻をさわる鑑賞ワークショップ「彫刻をさわる」を受けた。

感想を一言で言えば「普通」である。全盲の私にとって“さわる”ことは物を認識する普通の手段。むしろ“さわる”ことのできない物をどう感じるかを考える日々である。そういう意味では盲学校の生徒とさほど違いはない。大きく違うのは若さあふれる10代か、中年のおっさんかであろう。

いや、この違いが結構大きいのだ。子供達が彫刻をさわる姿は微笑ましく、楽しげである。しかし、中年のおっさんでは不審者と思われるも仕方ない。視覚障害者だとわかれば怪訝な目を向けながらも素通りしてくれるだろうか。

これこそが鑑賞方法の一つとして“さわる”が認識されていない証であろう。“さわる”ことは怪しいのである。まして晴眼者（見える人）にとって“さわる”とは非日常の行為であり、芸術作品に“さわる”などもってのほかなのだ。

さて、シンポジウムはどうだったか？映像から伝わるのは子供達が自由にのびのびと彫刻を“さわる”姿。ありがちな物当てクイズもなく、説明過多にもならず、主体的なのだ。タイトルが「彫刻に触る」ではなく「彫刻をさわる」となっているのもうなずける。

私は“さわる”とは「共鳴」ではないかと思っている。子供達が自分の姿や経験と彫刻を重ねた自分との共鳴。消極的な子も一緒にさわったのはその場の雰囲気や会

話に共鳴したからだろう。好きな彫刻だけさわり続ける共鳴もいい。振り返る共鳴、タイトルと対比する共鳴もいい。共鳴の中心には常にさわった彫刻がいる。

「見えるからさわらなくていい」との意見もあるだろう。否定はしない。でも、ブランコのチェーンの冷たさや鉄のにおい、滑り台でぬらしたズボンや先にある水たまりに覚えはないだろうか。全身でさわっていた記憶のかけらは存在の中に織り込まれているはず。

スーパーで野菜を“さわる”、スイカを“たたく”。手は何を感じ、心は何を描いているだろう。少し先を想像していないだろうか？ おいしい時間、笑顔の家族、喜びの共鳴を。

私にとって“さわる”はこれと大差ない。自分と他者と彫刻と風景と作家と共鳴を求め感じようとする行為である。それが正解か誤りか、視覚の様子と一致しているかは大きな問題ではない。共鳴が増えれば、喜びも増える。それだけである。

陶芸家、河井寛次郎が残した言葉に「美の正体 ありとあらゆる物と事との中から見付け出した喜」というのがある。“さわる”も喜びであると私は思う。やみくもに“さわる”を推奨するつもりはない。“さわる”礼儀も必要である。

その豊かな鑑賞方法を広げ、彫刻を守るためにも、彫刻清掃という名の下でさわりたいと思う。





コロナ禍で活動が制約される中、彫刻美術館友の会恒例のバスツアーが2021年10月30日、2年ぶりに行われ、胆振管内白老町の民族共生象徴空間「ウポポイ」を訪ね、先住民族アイヌの歴史と文化の香りに触れる一日となった。25人が参加したツアーの中から、桜田信明さん、高倉登世子さんに印象記をお願いした。

少数民族抑圧の歴史を再認識 桜田信明さん

最近、松浦武四郎日記などを読み、武四郎がアイヌの人との42日間に及ぶ野宿による道内探検を終えた後、宿に入り沐浴、髪結、清潔な布団に臥した時、「ほっとひと心地つくと同時に、アイヌの暮らしにあった人間の真味を失なったような気がした。人を思う心、助けあう姿に高貴さを感じ、儒教など知るよしもないが、親孝行な人々である」と述懐していることを知りました。

今回、ウポポイを訪ね、日本人の美德としていた、争いを好まず、「和をもって貴しとする」考えなどはアイヌ文化に源流があるのではないかと感じた次第です。

また、アイヌ民族で、歌集「原始林」を自費出版した森竹竹市さんの碑文を読み、南米の歌手、メルセデスソーサの「この手に大地を」を思い浮かべ、現代もなお続く少数民族抑圧の認識を新たにしました。

先住民族の悠久のロマンに浸る 高倉登世子さん

コロナ禍で去年は中止となり、参加者の期待も熱かったアイヌ文化に触れあうバスツアー。太平洋とポロト湖が太陽にキラキラ輝く中、ウポポイのゲートをくぐりました。その広大な敷地に圧倒され、「国立アイヌ民族博物館」の収藏品、スケールの大きさに感動しました。中でも衣食住に関わる展示品に施された芸術的な装飾の数々、また、間近で目を凝らして初めて分かった繊細な手仕事のすばらしさ。完成までにどれほど根気と時間をかけたことでしょうか。装飾に使われていたビーズ玉など海上交易を通じて国外から渡ってきたものと知り、悠久のロマンを感じさせられました。

私自身、札幌の生まれ育ちなので子供のころからいろいろな機会にアイヌ民族のことは教わったつもりでしたが、まだまだ勉強不足であったことを痛感しました。

友の会ニュース

医療雑誌「ケア」連載

「さっぽろ野外彫刻マップ」冊子化計画

太陽財団助成金を申請

友の会が2018年4月号から20年3月号までの2年間、北海道医療新聞社の雑誌「ケア」に連載した「さっぽろ野外彫刻マップ」を冊子化する計画が動き出した。

連載は2年間で24回分。1回5作品を写真と解説で紹介したもので、札幌市内の彫刻120点余りを掲載した。「せっかくの連載をもっと多くの人に見てもらい、散策のついでに彫刻に親しんでもらえたら」との思いから、医療新聞社の了解を得て冊子化の計画が持ち上がった。

地元出版社への見積もり依頼と同時に地域の社会活動を助成する太陽財団の助成金制度への申請も行った。同制度には友の会が2013年に彫刻美術館で実施した「市民の愛蔵彫刻展」の際にも助成を受けており、再度の申請となった。申請の結果は1月頃に判明する見込み。

札幌彫刻美術館開館40年

入館者40万人を達成

2021年、開館40年を迎えた本郷新記念札幌彫刻美術館の入館者が昨年10月16日、累計40万人に達した。

40万人目は札幌市中央区の田島邦好さん（87）と妻セツ子さん（86）で、吉崎元章館長か



開館40年で入館者40万人に達成した美術館

ら記念品が贈られた。

美術館によると10万人達成は開館6年目の1986年。さらに20万人が97年、30万人に達したのは2012年で、開館31年目だったという。40万人達成について吉崎館長は「集客も大事だが、これからも質の高い作品の展示を心がけ、多くの人に彫刻を楽しんでもらいたい」と話している。

彫刻美術館運営協議会開催

友の会から高橋大作副会長が参加

当面の課題などを協議

札幌彫刻美術館の今年度第2回運営協議会が昨年10月15日、同美術館で開かれ、友の会から高橋大作副会長が出席した。

同副会長によると、美術館側から新型コロナウイルス感染症の影響と対応、令和3年度上半期活動報告、さらに当面の課題などについて協議した。

運営協議会は美術館の業務、

運営全般に対する意見、提案を求めるもので年4回程度開く。参加者は札幌市、利用団体、地域自治会、学識経験者から構成されている。

彫刻美術館

図書・情報コーナー常設

本郷新の関連書籍など公開

札幌彫刻美術館に常設の「図書・情報コーナー」がお目見えした。

本郷新のアトリエだった記念館2階の一角に設けられ、本郷新の著作や本郷が所蔵して



いた芸術書、展覧会図録などのほか、友の会の元会員、故仲野三郎さんが全道をくまなく調査して収集した彫刻作品の写真アルバムを閲覧できる。吉崎元章館長は「本郷作品を鑑賞したあとコーナーを利用してもらえれば」と話している。蔵書などの整理には友の会のメンバーが4年がかりで支援した。

なお、これを機会に友の会の会報「いずみ」も創刊号から最新号までを保管、同コーナーで自由に閲覧できるようになった。

おめでとうございます

橋本信夫会長卒寿のお祝い

友の会会長、橋本信夫さんが昨年11月29日、満89歳の誕生日を迎え、「卒寿」(90歳)となった。会長は後志管内岩内町生まれ。北大獣医学部卒。獣医学博士、北大名誉教授。1997年から、札幌彫刻美術館友の会会長を務めている。

2022年 友の会新年会 2年ぶり開催(予定)

友の会の2022年新年会が2月27日午前11時から、札幌・中央区北2西2の「ネストホテル札幌駅前」で開かれる。昨年コロナ禍で中止となり、2年ぶりの新年会。また、昨年、実現できなかった札幌芸術の森美術館学芸員(前本郷新記念札幌彫刻美術館学芸員)山田のぞみさんの講演も行われる。

ご協力ありがとうございました 友の会活動資金募集

前号(77号)掲載以後、次の方からの寄付がありました。

(敬称略、順不同)

田村 陽子(札幌)
橋本 洋一(苫小牧)
小野寺紀子(札幌)
高島 郁夫(札幌)
佐藤 泰子(札幌)
寄付金累計総額

13万3000円

友の会「つばやき」コーナー

私と彫刻

大通西12丁目、バラ園にある佐藤忠良さんの《若い女の像》は散歩のたび、引き付けられ、足を止めて眺めていました。写生の機会があり、よく見ると裸婦像と思っていたのが、ジーンズ姿に気付きました。ジーンズの布しわが、はつらつとした若さを感じさせる大好き作品です。

細谷 明美さん

1991年、大通西8丁目に、今は子供たちの人気の的となっている遊ぶ彫刻、イサム・ノグチの《ブラック・スライド・マントラ》が設置された。当時私は、今だ!と思ひ子供たちの仲間入りの初体験。最初は少々難儀なところを感じながら、ほかはスムーズに滑れた。よき思い出となっている。

斎藤美年子さん

2015年、ツアーでベルリンを訪れ、自由時間にケーテ・コルビッツのピエタを見て、住宅街にある古い建物を利用した瀟洒なケーテコルビッツ美術館に。《母と二人の子供》の像が出迎える美術館。会いたかったケーテの作品に、息子と孫を戦争で奪われ、ナチにも迫害されたケーテの悲しみと人間への深い愛情を思い胸が熱くなり、忘れられない旅でした。

奥井 登代さん

東京在住ですが、野外彫刻が好きで友の会に入会しました。年に数回、足を運び、近美、芸森、宮の森などを巡ります。去年は10月に札幌へ行き、札幌駅地下に設置されている貝澤徹さんのフクロウの木彫刻をやっと鑑賞出来ました。道内は彫刻が多く、いたるところで鑑賞できるのがうらやましいです。

東山 早苗さん

事務局日誌 ▼21年8月30日＝中島公園《森の歌》台座修復工事立ち合い(橋本会長ほか) ▼9月22日＝ケア連載冊子化でアイワード社に見積依頼 ▼10月4日＝会報77号発送作業(エルプラザ) コロナ禍で9月末発送を延期 ▼14日＝役員会(エルプラザ) 「いずみ」78号編集企画、ケア連載「野外彫刻マップ」冊子化計画協議ほか ▼30日＝「ウポポイ」バスツアー実施 ▼11月11日＝役員会(エルプラザ) 「野外彫刻マップ」の太陽財団助成金申請報告などを協議。

編集後記 ▼2022年の幕開けに78号をお手元に届けることが出来ました。次回発行は4月、そして7月の発行は80号。人間でいえば「傘寿」のお祝いという訳です。一つの区切りとして何か特集を組むのかどうか。多くの方のご意見とアイデアをお願いしたいと思います ▼78号締め切り間際に橋本信夫会長が昨年11月、「卒寿」(90歳)を迎えられたとの情報。いずれ会報でも祝意を表したいと思います。まさに「80号」と「90歳」。嬉しい年になりそうです。(大内)

札幌彫刻美術館友の会
会報「いずみ」 No.78
 2022年1月1日発行
 発行人 橋本 信夫
 編集者 大内 和
 (札幌市清田区清田5-4-6-30
 011-884-6025)
 印刷 山藤三陽印刷

会報「いずみ」78号 目次

自作自選48《祈 跡》	花輪 大輔	表紙
宮の森の四季48「美術館のポテンシャル」	吉崎元章	2
風見鶏「もう一つの石川啄木像」	大内 和	3
寄稿「大分大シンポに参加して」	越山正禎	4
レポート「バスツアーでウポポイを訪ねて」	桜田信明、高倉登世子	5
友の会ニュース		6-7
ケア連載冊子化計画／彫刻美術館来館者40万人達成／彫刻美術館運営協議会 ／図書情報コーナー設置／橋本会長卒寿／22年新年会予告／支援金寄付者		
事務局日誌、目次、美術館行事予定ほか		8

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本 館

■本郷新・全部展⑤

本郷新の言説

～4月10日(日)

本郷新は芸術論、作品論、風土論など数多くの文章を出版や手記を通じて遺している。それらの言葉や思想をなぞって彫刻や絵画に立ち返り、言説や造形との関係を検証する。

■さっぽろ雪像彫刻展2022

1月18日(金)～30日(日)

初回開催から13年目を迎えるさっぽろ雪像彫刻展実行委員会との共催展。市内の造形作家および北海道芸術デザイン専門学校(予定)などの学生チームが雪の彫刻作品を制作、展示する。

記念館

■本郷新・全部展④

100の石膏像

～4月10日(日)

美術館所蔵の石膏像364点のうち、野外設置のための4^級級の大型の彫像から細やかな造形美に触れられる小像に至るまで100点を厳選して紹介。ブロンズ像の鑄造工程にあって重要な役目を果たしながらもあまり語られることのない石膏原型像の魅力に迫る。

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中です！ご覧ください

<https://sapporo-chokoku.jp>